
優性新世界

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優性新世界

【コード】

N0551G

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

勤め先の医院へ向かう道すがら、何時ものことであるが、デモ隊と遭遇した。

勤め先の医院へ向かう道すがら、何時ものことであるが、デモ隊と遭遇した。

彼らは一様に同じ内容のプラカードを持っていた。

『遺伝子治療反対！ 努力者差別だ！』と書いてある。

ハアと私は嘆息して、彼らから見えないように身を縮めて車を運転した。

彼らにバレてはコトだ。折角、五体満足に生まれたのに片輪かたわにされてしまいかねない。くわばら、くわばら。

私は医院の駐車場ではなく、近くのコイン式駐車場に車を停めた。医院に入る際も、正面玄関を避け、裏口から入った。

私は受精卵の遺伝的正否を調べるなどする、遺伝子治療を専門に行っている。

二階の診療室に行き、正面玄関を見下ろすとデモ隊が座り込みをしていた。そのうちの一人が指向性マイクを持ち、アジっていた。

「この病院は悪魔の巣だッ！」

「「そうだ、そうだ！」」

「やつらは優生学の徒とだッ！」

「「そうだ、そうだ！」」

「倫理意識が希薄だッ！ 努力者の権利を踏みにじっているッ！」

「「そうだ、そうだ！」」

全く如何して毎日、座り込みなどできるのだろう。一銭の得にもならんのに。

昨日も一昨日も、一昨けふおといひ昨日も、もっと前も、かれこれ一月ほど彼らはこうしている。

雇われ医者の特権にとっては、患者が多かるうが少なかるうが、給料に差はないから構わないが、患者にとっては困るだろう。

座り込みの人数が多すぎて、正面玄関に向かおうとする来診の患

者たちが渋い顔をしている。

邪魔だろう、と思う。

患者にとつては努力者とやらがどうなるかと構わないのだ。いや、正確には構うかもしれないが、所詮他人事だ。自分の病への不安には代えられない。

来診の一人がアジテーターに文句を言ったようだ。「おたくら、邪魔なんだけど」

「邪魔だと？ 我々は崇高な使命を遂行しているのだ」

「おたくらがさあ、大変なのは解るがこつちも病気なんだよ。俺はヘルニアなんでねえ、玄関まで遠回りせにやならんと云うのは億劫だ」

「おまえは健常者ではないか。それくらいの努力、惜しむな」

「おたくも、健常者に見えるが？」

むつとアジテーターが顔を顰めた。どうやら劣勢らしい。何だか気分がよい。

「ああ、確かに俺は健常者だが、スポークスマンなのだ。努力者の中には口すら利けんヤツもいるんだ。当然じゃないか？ 我々が保護せねばなるまい」

「スポークスマンねえ、それに保護ねえ。でもなあ、俺の息子も障碍持ち」

「障碍とは何だッ！ 障碍とはッ！ ハンデキャップ、もしくは努力持ちと言え！」

今度は来診が顔を顰める番だった。「おたくさあ、偉そうだが、その努力持ちの肉親でもいるのかい？ いねえだろう？ 俺はいるんだよ。息子が視覚に障碍があるんだ。そもそも、俺の血らしくてなあ、孫に遺伝するのも悪いからここの先生にお世話になったんだが」

「きさまは、優性学の徒に協力すると言うのか？ 何たる男だッ！

俺は目の届く限り遺伝子治療など受けさせていないぞ」

傲慢するようにアジテーターが言った。

来診は呆れたように肩を竦めて、踵を回した。

「おい、待て。きさま！」

アジテーターが何を言っても彼は振り返らなかった。

「先生、先生」さっきの来診患者が私に言った。

「お孫さんは、順調ですか？」

「ええ。いい塩梅あんばいでさあ。これで孫は辛い思いをしないと思うと健やかですよ。ええ。春彦のやつあ、緑と赤の区別もつかんから虐められてなあ……」

遠い目をして患者は外を見た。

「よかったですね」と私が言うと、彼は微笑んだ。そして、診察室を辞した。元々彼はヘルニアの治療に来ていたのだ。正確に言えば、私の患者ではない。

何人が患者の相手をしていると昼時になった。昼食を摂とって午後
の診察に努めた。今日は手術予定も検査予定も入ってはいなかった。
三時を過ぎたあたりでサイレンが鳴るのを聞いた。

救急車のサイレンだ。

かなり、近い。

この病院は救急病院でもある。

サイレンは病院の前でドブプラーするのをやめた。やはり、うち
に来たらしい。

「どいて、どいて」と救急隊員が怒声をあげているのを聞き、窓際
へ向かった。

デモ隊と救急隊員がもみ合っていた。

ストレッチャーを正面玄関横から搬入しようと救急隊員たちはし
ているのだが、座り込みが邪魔なのだ。

急患だと云うのに、座り込みたちは退とかない。

全く退く気もないようだった。

急患は心臓麻痺で死んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0551g/>

優性新世界

2010年10月26日14時05分発行